

昭和26年(1961)春から冬にかけて、日本一称名滝(滝つぼをいれて落差350m)の調査(20名)を中心とする学術調査を行った際、5月28日早朝、称名谷の中の廊下、大谷の出合あたり左岸にニホンカモシカが出現したのを16ミリのカラーフィルムにおさめ昭和37年の日本生物教育学会第17回大会(富山)で講演した際におめにかかけました。

しばしば低山帯の林道や登山路(例えば朝日町サカサマ谷、上市町馬場島、大山町有峰真川、立山町長倉)などにも姿を見せたことがあります。また県西部では、生息地は限られており、上平村の大笠山に比較的多く、利賀村坂上土地内にも記録があります。本種はテリトリーを持ち、ツガイで行動することが多く、休憩場は見晴しのきく岩場であることが多い。急な傾斜地を巧みに行動いたします。

植食性動物で灌木ノ枝葉や草本を3~5cmにちぎって食べウシの様に反すういたします。角の基部の輪状の隆起は年令と共に増加いたします。

獣類には親しみの深いものが沢さんありますが、述べたいものの1種に就いて一寸記します。それは私と満3年同せいでいたヤマネのことです。ヤマネ科ヤマネ属ヤマネ、一科一属一種、日本特産で気温の低下とともに冬眠する。リスに似ていますが、はるかに小型で、背中に黒色の正中線があり、尾は短く、頭胴の半分位の長さであります。冬眠中は、尾部で頭をかくす様にピンポン玉のような大きさで丸くなって、立山温泉の廊下どころがっているのをみつけ、持って帰り、鳥かごに入れ満3カ年飼育しました。食料はヒマワリの種子10ケと、水あるいは牛乳だけを与えました。夜行性であります。カゴから取り出すと、ぶるっと冬眠からさめて、私の体を運動場のようにして、よくなつてくれました。名前をヤッチャンとよび、ミスのまままで昇天しました。

創設60周年の歩み

副会長 本多啓七

当生物学会も、早や創設60周年を迎え、思えば幾多の変動を経て今日まで続いてきた。

創設50周年を迎えたさいには、当学会の初代会長である菊池勘左工門先生を佐渡からお招きして、富山県民会館で、一般公開の「佐渡のトキ」と題する特別講演をして頂き、参加の聴衆に深い感動を与えるところのトキ保護の重要性を叫ばれた。また後鰐類の研究に専念しておられた安部武雄先生をはじめ7名の会員の方々が研究発表をなさって、盛大な創立50周年記念大会であった。

52年度では1泊2日の新潟県松之山町周辺の自然研修会で風衝林やブナ林の観察が印象深い。次に哀しいことがあった。長らく本会の理事として活躍されていた安部武雄先生が他界されたことである。謹んで、生前の当学会に寄せられた労に対し、感謝状を贈呈した。

53年度では1泊2日の白山スーパー林道沿線の自然研修会で、特に天生峠湿原の観察が印象深く、研究発表においても、白木峰や東笠山の湿原に関するものがあつた。なお、小林会長は、「モスクワの国際遺伝学会会議に出席して」と題して発表して下さい。

54年度では4月28日から2泊3日の佐渡の自然研修会を実施した。初代会長の菊池先生の大歓迎を受け、ドンデン山の宿舎で先生と共に盃を傾けてご健在を祝ったことが、今生の別れとなるとは、先生はあれから1年とたたない2月9日に永眠なさつた。われわれと最後の別れをするために佐渡に招かれたのか、佐渡にいる間はわれわれと共に行動を取られ、くまなく案内され、説明して下さい。お姿を思い、人生の無情が感じられてならない。この時の会誌、第20号を「故菊池勘左工門先生追悼号」といたし、先生に感謝状を贈呈した。

55年度では、福井県九頭竜峡の1泊2日の自然研修会(7月12日~13日)、学術講演会では「遺伝子の組みかえとは」-飯野東大教授、「遺伝子工学の展望」-国立遺伝研究所田島先生(10月6日)、さらに「ビルマのゴマ」-小林会長(11月22日)など、感動の多い年であつた。

56年度では利賀村を中心とした蘚苔類の研修、会誌が国際標準逐次刊行物となつた。

57年度では利賀村での日本蘚苔類学会全国大会を後援した。

58年度では1泊2日の新潟県海谷峡谷と駒ヶ岳-焼山の研修会は特に印象深い。

59年度 当協会の二代会長として長らく、お世話して下さい進野久五郎先生が10月19日に永眠されたので、早速、感謝状を贈呈してご冥福を祈り、第25号を追悼号とする。

60年度では1泊2日の白骨温泉、乗鞍岳の思い出多い研修会を実施する。

以上、この10年間に、創設以来お世話して下さいの方々が他界される変動期であつた。今後は、世界に立つ日本の将来といった展望で、この学会の歩みを強固にしたいものである。

10年間の学会誌記載項目一覧

(国際標準逐次刊行物登録番号 ISSN 0389-7494)

1 第16～17号 創設50周年記念特集(昭和52年2月)

巻頭言	小林貞作	
各会長の思い出		
初代会長	菊池 勘左エ門	1
二代会長	進 野 久五郎	2
三代会長	植 木 忠 夫	2
創設50年の歩み	本 多 啓 七	3
各会員の思い出		10
学会誌の研究発表目次		13
創設50周年記念大会		
記念大会の状況		24
菊池先生の特別講演要旨		26
研究発表		
1. 兎と兔の歯牙の形態について	坂 下 栄 作	27
2. 中部日本海沿岸産後鰐類追加目録	安 部 武 雄	31
3. ニベ科の魚	津 田 武 美	33
4. 昆虫と環境	田 中 忠 次	36
5. 富山県旧下新川地区産の地衣類目録	本 多 省 三	38
6. 僧ヶ岳の植生と保護	長 井 真 隆	42
7. 生態型表式とこれによる立山植生の特徴	本 多 省 三	46
	本 多 啓 七	
会 則		49
会 員 名 簿		51
本 会 記 事		55
編 集 後 記		56

2 第18号 (昭和53年2月)

巻頭言	小林貞作	1
研究発表		
1. 氷河のノミ	新 井 康 平	3
2. 卵白交換法の開発	大 田 保 文	5
3. 富山県親司川のケイソウ	志 垣 修 介	9
4. 富山県産シダ植物雑記	大 島 哲 夫	15
5. 最近本県で知られてきた植物について	小 路 登 一	19
・帰化植物漫談	本 多 省 三	24
	本 多 啓 七	
6. ヌマガヤ湿原の生態	本 多 省 三	25
	本 多 啓 七	
7. 鼠が切歯(門歯)で物を齧る時の工学的考察	坂 下 栄 作	31
本 会 記 事		34
会 員 名 簿		35
編 集 後 記		39

3 第19号 (昭和54年2月)

巻頭言	小林貞作	
研究発表		
1. 閉鎖空間におけるスズメの営巣能力	大 田 保 文	1
2. 白木峰・小白木峰の池塘の藻類	安 井 一 朗	9
	志 垣 修 介	
3. ヨーロッパの植物標本庫について	佐 藤 卓	25
4. 脊椎動物の歯の構造について	坂 下 栄 作	30
5. 東笠山・寺地山の湿原植生	本 多 省 三	36
	本 多 啓 七	
野外研修会報告		43
本 会 記 事		46
会 員 名 簿		47
編 集 後 記		49

4 第 20 号 故 菊池勘左エ門先生追悼号 (昭和55年5月)

巻 頭 言 会長 小林 貞 作

故 菊池勘左エ門先生を偲ぶ

1. 菊池先生とわが生物学会 副会長 本 多 啓 七 1

2. 菊池先生の忘れられない思い出 二代会長 進 野 久五郎 3

3. 菊池ラインの憶い出 三代会長 植 木 忠 夫 7

4. 菊池先生の思い出雑記 学会理事 坂 下 栄 作 8

5. 葉っぱに聞いてごらん 学会理事 長 井 真 隆 9

6. 菊池先生と佐渡のトキ 学会幹事 本 多 省 三 12

7. 佐渡ヶ島の印象 学会理事 大 野 忠 廣 14

○ 最近接した県内の帰化植物 本 多 啓 七 17

○ 故菊池勘左エ門先生の業績集 坂 下 栄 作 18

○ 富山県内の低地産タンポポ 本 多 啓 七

○ 大島 哲 夫 21

研 究 発 表

1. 日本北アルプス周辺の風衝植生とその生態(第一報) --- 本 多 省 三 22

本 多 啓 七

2. 哺乳類の歯の性差について 坂 下 栄 作 35

野外研修会報告 41

本 会 記 事 46

会 則 49

会 員 名 簿 49

編 集 後 記 53

5 第 21 ~ 22 号 (昭和57年3月)

巻 頭 言 会長 小林 貞 作 1

研 究 発 表

1. ズワイガニとベニズワイガニの雑種二代目の不稔について --- 堀 井 直二郎 3

2. 蛾の訪花について 田 中 忠 次 11

3. 1981年の昆虫メモ 田 中 忠 次 22

4. 日本カモシカの歯について 坂 下 栄 作 24

5. 馬の歯について 坂 下 栄 作 28

6. 庄川のアユについて 佐 藤 久 三 43

7. 富山県東部におけるイワツバメの分布進化 太 田 保 文 45

○ シベリアと中央アジアの並木と花壇 本 多 啓 七 50

8. ユーラシア大陸と北米大陸のフロラにらびに植生 本 多 省 三 51

本 多 啓 七

野 外 研 修 会 報 告

本 会 記 事 73

会 則 81

会 員 名 簿 83

編 集 後 記 85

6 第 23 号 (昭和58年8月)

巻 頭 言 小林 貞 作 1

研 究 発 表

1. 富山湾東南沿岸で魚礁として利用される
非造礁性サンゴ群集について 堀 井 直二郎 3

2. ユキノシタ科植物の訪花昆虫 田 中 忠 次 13

3. 富山県内のスマレについて第1報 塩 谷 佳 和 30

4. 富山県産シダ植物雑記(3) 大 島 哲 夫 35

5. 食肉類の歯についての雑録 坂 下 栄 作 41

○ 生物学会誌投稿規定 40

6. 富山県における天然記念物指定植物と
代表的植物群落の分布及びそれらの特徴 本 多 省 三 45

本 多 啓 七

本 会 記 事 71

編 集 後 記 72

7 第 24 号 (昭和59年3月)

巻頭言 会長 小林 貞 作

研究発表

- 1. 日本産フナムシ科等脚目の分類と分布 布 村 昇 1
- 2. 食性にもとづく歯の観察について(哺乳類) 坂 下 栄 作 6
- 3. カミキリムシ以外の甲虫の訪花 田 中 忠 次 11
- 4. 黒部峡谷のKar地形とその植生 本 多 啓 七 33

本会記事 71

編集後記 72

8 第 25 号 (昭和60年3月)

巻頭言 会長 小林 貞 作

故 進野久五郎先生を偲ぶ

進野先生のお写真と感謝状

ありし日の進野久五郎さんの思い出 三代会長 植 木 忠 夫 1

故進野先生とわが生物学会 副 会 長 本 多 啓 七 2

研究発表

- 1. 象 (Elephants Elefanten) の歯について 坂 下 栄 作 4
- 2. モミ (Abies fivma Sieb et Zucc) を訪ねて 中 川 定 一 11
- 3. オニバス (Euryale ferox Salisb.) の生育 堀 与 治 15
- 4. 蔓植物 (Liana) の生態 本 多 啓 七 30

本会記事

編集後記

9 第 26 号 (昭和61年3月)

巻頭言 会長 小林 貞 作

研究発表

- 1. 歯に関連ある孵化 Hatching, Eclosion に就いて 坂 下 栄 作 1
- 2. 厨房から出るごみに依存しないで繁殖する黒部・砺波
両青少年の家のスズメ (passer montanus) 大 田 保 文 15
- 3. カミキリムシの訪花 田 中 忠 次 21
- 4. 宇波川の植物について 中 川 定 一 51
- 5. ゴヨウマツ, ヒメコマツ, キタゴヨウの学名と和名に
対する提案 本 多 啓 七 56
- 6. 入善町負釣山の植生について 本 瀬 晴 雄 59
- 生物学会誌投稿規定 63
- 7. 富山湾沿岸の海浜植物とその生態 本 多 省 三 64

本 多 啓 七

本会記事

編集後記

創設60周年記念大会

1 記念大会の状況

本学会の創設60周年記念関連事業として、夏の中国研修旅行、秋の記念講演、祝賀会等が企画され、次のように実施されました。

- ア. 昭和61年8月8日～8月22日 60周年記念海外研修旅行 中国
- イ. 昭和61年11月29日 記念講演 小林貞作先生 富山市科学文化センター
祝賀会 富山市職員会館
- ウ. 会誌の特集について 昭和62年3月
- ア. については別記の通りである。
- イ. について

記念講演

本学会会長小林貞作先生には、昭和61年10月、岩波書店「ゴマの来た道」を発刊されましたが、丁度本会60周年記念の年とあって、講演をお願いすることになりました。要旨については後述しますが、当日は富山市科学文化センターの講堂にて開催され、会員以外にも多数の来聴者があった。ゴマの歴史から学術的なことまでスライドで興味深くお話しされ盛会であった。

祝賀会

11月29日は定例の研究発表会があり、この発表のあと記念講演をして祝賀会へとすすんだ。祝賀会は富山市職員会館に21名が参加して行なわれた。本生物学会60周年を迎えたことの思い出話に花がさき、時間を忘れるほどであった。

それと併せ、小林先生の「ゴマの来た道」の祝賀も行なわれ、長らく本生物学会会長として本会を育てられたことと「ゴマの来た道」の発刊を祝った。

ウ. について

本学会創設60周年を記念して、昭和62年3月発行の会誌は特集号とすることにし、原稿を募集したところ、例年になく多数集まった。

随想2編

研究発表10編

今後、本生物学会がさらに維持・発展していくために会員諸氏の御研究、御協力を願うと共に、富山県内の自然探究をさらに進めていきたいものです。そして、いつかは富山県内の生物相の全様を明らかにしたいものです。

2 小林先生の特別講演要旨

「ゴマの来た道」

「食べる丸薬」と称されるほど栄養価の高い貴重な食品、ゴマは、古代アフリカのサバンナに生まれ、絹の道よりはるかに遠い「ゴマの道」を長年かけて旅して、極東の日本までやってきた。旅の途上で多種多様のゴマ食文化を生み、粗野な味と姿はしだいに洗練されていく。ゴマ一粒にこめられたこの壮大なロマンを辿ってみたい。

これがこの「ゴマの道」の紹介のことばである。

小林先生とゴマの出会いは先生が名古屋大学へ入学された戦時中にさかのぼる。どの大学でも戦時の食糧対策のためにいろいろな面で増産に拍車をかけていた。その時、名古屋大学の小林先生の恩師はゴマをすすめられたそうである。それ以来、今日65才まで「ゴマ」一すじなのである。なんと一途なことか。

ゴマのことで特に心にのこったことは

① ゴマのふるさとサバンナ植生

今から約7,000～8,000年前、アフリカ土着人は実におどろくべきことを行った。それは、野生の種子や根を取って来て、これを植え、植物として食べ始めたことである。三十種ほど生育分布している野生ゴマの中から、一種の食用ゴマを選び出したのである。

② 開けゴマという植物

『アラビアンナイト』にでてくる「開けゴマ！」

ニジェール川の最大の支流であるベネ川、昔からゴマの生産地として知られ、野生ゴマも自生している所である。この地では古くからゴマのことをベネと呼び、ゴマ油とベネ油とよんだ。このベネは「幸福」と表すといわれる。

③ 「閉じよゴマ」の発見

ゴマは収穫期をすぎると、さく果が開き種子が地面に脱落して損失が大きかったが、さく果が熟しても落ちない「開かないゴマ」(非裂開性、ノン・シャタリング)が開発され、実ってもゴマが落ちないような形態になってきている。

④ ゴマの魅力

昔からゴマは「不老長寿の秘薬」といわれ、中国では食物料理に、香りと味にすぐれた多量のゴマやゴマ油が用いられ、中国料理の基本をつくった。一方日本では、精進、仏事、会席などの料理となり、日本料理の基本となった。「うまみ」のもとである油脂だけでなく、良質のタンパク質、ミネラル、ビタミンを含むゴマは不老長寿の健康の源点である。

(文責 本多省三)